

海外事務所
だより

イギリスの地方自治体による市街地活性化政策

ロンドン事務所所長補佐 佐藤 武弥 (長野市派遣)

ロンドン事務所

はじめに

郊外型大規模ショッピングセンターの発展などの理由から、都市中央部の商業機能が低下して都市中心部が空洞化してしまう現象は、日本だけでなくイギリスでも従来から大きな問題となっています。さらに近年は、地価高騰による郊外での住宅建設の増加や少子高齢化なども市街地の空洞化に拍車をかけています。

今回はイギリスの地方自治体を訪問した経験を踏まえて、中心市街地活性化政策の状況と自治体の取組みについてご紹介したいと思います。

中心市街地活性化までの道のりと支援機関

イギリスでは一九七〇年代から一九八〇年代にかけて、自家用車の普及に伴って郊外型の大規模店舗が発展し、結果として都市の空洞化現象やそれに付随するさまざまな問題が発生してしまいました。しかし、サッチャー政権後の一九九〇年代からは、国では徐々に既存の中心市街地にある商業区域を再開発する方針に転換し、それ以来は「コンパクトな街」を目指したまちづくりが進められています。

イギリス政府は一九九三年に中心市街地の商店を再開発することを狙いとして、都市計画の基本指針というべきPPG (Planning Policy Guideline) の第六項を発表しました。三年後の一九九六年には、このPPG6が改正され、持続可能な開発 (Sustainable Development) というキーワードを盛り込んで、中心市街地の活性化を重視する方針をさらに明確にしています。

また、政府関連の機関ではないのですが、一九九〇年にはタウンセンターマネジメント協会 (ATCM) が設立されて地方自治体の市街地活性化をサポートし続けています。ATCMは地方自治体と民間企業などからの約五〇〇の会員によって構成されており、

中心市街地活性化までの流れ

年	内容
1970	郊外型ショッピングセンターの開発 都市の郊外化が本格化
1980	
1990	ATCM (タウンセンターマネージメント協会) 設立
1993	PPG6 (Planning Policy Guideline) 発表 地方都市の中心市街地を重視する方向へ
1996	PPG6 改正 持続可能な開発 (Sustainable Development) の提唱 郊外開発の抑制、既存市街地の活性化
2000	「都市白書」でコンパクトな街づくりの提唱

メンバーからの会費、大企業からの出資、政府機関からの援助などを財源として、情報提供・研究・人材育成などの面から地方自治体をサポートしています。

このATCMの組織を見ても分かるように、官民一体となった市街地活性化への取り組みがイギリスのタウンセンターマネジメントの特徴となっています。

具体的な事例 「ニューキャッスル・アンダーライム」

今回訪問したのは「ニューキャッスル・アンダーライム・バラカウンスル」(ニューキャッスル)、ここはイングランド中部に位置する人口約二万人、面積約二万㎡の自治体で、余談ながら世界中の「新しい城」を意味する自治体と毎年交流会議を開催しており、愛知県の新城市とも交流があります。

このニューキャッスルは、もともと中世に開かれていたマーケットを中心に発展した都市で、産業革命の時期には炭鉱の開発、その後も陶器や自動車工場などの産業が自治体の財政を潤してきましたが、現在これらの産業は廃鉱、規模の縮小・撤退などを経て、新たに基幹となるべき産業を模索中です。

近年、近隣の自治体が次々と合併していく中で、ニューキャッスルは独立の道を選びました。

都市計画

ニューキャッスル市内のホテルで行われた都市計画会議の様子を見学してきました。

職員が議長を務めるこの会議には、警察・消防・救急などのほかに民間部門からもキール大学などの地元大学や、住宅開発などの地域の開発に大きくかわる民間企業も何社か参加していました。

ここではニューキャッスルの一〇年計画の立案に向けて、どのような方針で都市計画を進めていくかということがプレゼンテーション形式で進められていました。参加者は、それぞれの専門的な立場からまちづくりに関する意見を交換し、会議は非常に活発なものとなっていました。日本ではこのような会議は行政側で決定してから他団体に対して説明を行うといった場合が多いのに対して、計画の立案段階から民間組織も参加して会議が開かれているということに驚きました。

タウン・センター

職員の方に案内していただき、実際に中心市街地の再開発の様子を見学しました。

ニューキャッスルがマーケットを中心にして発展してきた都市であることは述べましたが、数年前からこの中心市街地を「タウン・センター」として再開発し、商業機能



↑タウン・センターの商店街

を高めて住民の郊外流出を抑える方針を採っています。また中心部から程近いところには二件の大型スーパーマーケットがあり、夕方には買い物客でにぎわっています。

驚いたことは、タウン・センターの土地と建物のほとんどが自治体の管理しているものだという事です。約三〇〇年前に建てられた建物がそのままショッピングセンターの店舗として再利用されているのに始まり、四年前に新しく建築した部分についても既存の建物との整合性を図るために厳しく建築の基準を設定し、市の予算で建設したとのことです。なお、この商店街のテナントは市が店舗の用途や採算、将来性などを考慮して、厳しい審査の上で決定しているそうです。

中心部の広場には、市の「顔」とでも言うべき中世の商人たちが集ったギルドホールが元のままの姿を残していて、その周りには今でも露店が立ち並んでいます。中世の雰囲気を残している一方で、広場の一角には近

中心部の公園

代的な複合映画館施設も営業していました。この施設の建物も市が管理しているもので、経営している企業とは、なんと二五年間の契約を結んでいるということです。

ニューキャッスルでは市内に鉄道駅がないため、タウン・センターの開発と併せて商業区域付近にバスターミナルが市の予算で建設されました。ここには民間企業が運営するバスが発着しており、車を運転しない市民の足代わりになっています。車で市街地に向かう市民のためには、市営の大型立体駐車場も設置されていました。



↑タウン・センターのマーケットと複合映画館

ニューキャッスルでは人々の憩いの場所となる公園の整備にも力を入れており、市内の公園のいくつかは国内でも優秀な公園として何度か表彰されたことがあるそうです。

ロンドンをはじめとするイギリスの都市は大都市でも市街地の至る所に緑地があつて、もちろんニューキャッスルも例外ではありません。この緑地自体も日本の地方都市とは比べ物にならないほどの広さなのですが、この中心市街地の公園「ブランプトン・パーク」は単なる緑地としてだけでなく、さまざまな機能を持っているという特徴がありました。

この公園の主要道路に面している部分は広い芝生になっていて、天気の良い休日には広場でくつろぐ多くの人々が見られます。ここに設置された野外ステージはイベントの際に活用されているそうです。公園内には市立博物館、児童向けの遊具コーナー、さらにはカフェを併設した託児所・学童保育所も設置されていました。なお、この託児施設は住み込みの個人によって運営されていて、その運営は自治体から委託されているそうです。

市立博物館ではさまざまな資料とともにニューキャッスルの歴史が分かりやすいよう紹介されています。



↑公園の広場と託児施設

特に二階部分では昔のまち並みが再現されていて、小規模なテーマパークという趣でした。また、館内には市民の美術ギャラリーも併設されていました。別室の工作室では数名のボランティアスタッフが作業していたのですが、ここでは放課後の児童が作業することも多く、公園全体が児童受入れ施設となっているようでした。この方法だと、託児所や博物館に常駐のスタッフが勤務しているため、防犯上の観点からも優れているようです。

おわりに

このようにイギリスの都市でも日本と同じく、各地方自治体はさまざまな工夫を重ねて市街地の活性化に取り組んでいます。私の訪れたニューキャッスルは、その都市の伝統であるマーケットを上手に残して、地域の特徴を生かしたまちづくりを成功させていました。

「われわれは昔から住んでいる住民が安心して暮らすことができ、新しくこのまちを訪れた方も住みたくなるようなまちづくりを目指しているのです」。

市内を案内していただいた職員が語ってくれた言葉に、自治体への愛と誇りを感じました。

〈参考〉

ニューキャッスル・アンダーライム・バラカウンスル ホームページ
<http://www.newcastle-staffs.gov.uk/index.asp>
 A T O M ホームページ <http://www.atcm.org/>

海外生活 だより

ロンドン事務所

ロンドンから バレエ鑑賞記

ロンドン事務所 所長補佐 桑原 由香 (岐阜県派遣)

はじめに

ミュージカル、演劇、オペラにクラシック。ロンドンでは、一流の舞台がまちのあちこちで演じられており、まるでまち全体が芸術の宝庫です。TUBE (ロンドン地下鉄) の駅構内の掲示物は、舞台芸術に関するものが多く、ホームへ向かうエスカレーターでは色とりどりのポスターに目を奪われ、次は何を見ようかしらと楽しみになります。

バレエもイギリスの人たちに愛されている芸術の一つ。世界でも名高い英国ロイヤル・バレエ団はロンドン中心部コVENTガーデンにあるロイヤル・オペラ・ハウスをその本拠地とし、華麗な舞台が多くの人々を魅了しています。

イギリス式バレエ鑑賞

ロンドンに赴任して約一カ月が過ぎたころ、同僚から、ロイヤル・バレエ団演じる「SWAN LAKE (白鳥の湖)」の鑑賞に誘われ、バレエへの憧れを胸に秘めていた私は、初めてここロンドンで生のバレエに触れる機会に恵まれました。

日本では、バレエを鑑賞したいと思っても、一流の公演はとて値段が高く、また公演回数も限られているため、チケットを取ることも自体も至難の業でした。しかし、ここロイヤル・オペラ・ハウスでは、ほぼ毎日バレエやオペラなどの舞台が上演されています。また、約二二〇〇ある座席のチケットの値段は、一〇ポンドに満たない席から、一〇〇ポ

ンドをはるかに超える席まで幅広い料金設定がされており、誰でも一流の芸術に親しむことができる環境にあります。今はインターネットを利用してチケットを購入することも可能ですが、よい席を確保するためには努力を惜しんではならないということで、私たちは直接劇場のボックスオフィスまで足を運ぶことにしました。もちろんイギリス名物の Queue (行列) を覚悟の上で。

鑑賞を楽しむ人々

舞台当日の劇場内には、カップルやお年寄りの夫婦、そして子ども連れの家族まで、いろいろな年齢層の人たちが、思い思いにドレスアップして舞台を待っていました。観客席は華麗に裝飾されたヴィクトリア朝のデザインが残されており、当時の貴族たちの社交場の雰囲気を感じます。また、円形の観客席の両端には、ボックス席という四人がけの区切られた席がいくつかあります。家族やグループが一つの空間で舞台を楽しむことができるのもまた一興ですね。



↑ロイヤル・オペラ・ハウス

私たちの席は、それほど値段の高い席ではありませんでしたが、舞台上にほど近く、ダンサーたちを身近に感じられそうです。いよいよ舞台の開幕。チャイコフスキーの音楽で練り広げられる幻想的な世界では、舞台と観客がやがて一体に……。踊りの美しさは期待どおりで、中でも四人の少女たちが手をつなぎ、息を合わせて四羽の白鳥を踊る場面はやはり圧巻でした。また、完成された技が連続する中にもあっても、愛や悲しみなどの感情表現がとても豊かで、ドラマチックな舞台に酔いしました。

また、鑑賞に来ている人たちの劇場の楽しみ方はとても充実しています。三時間足らずの公演の途中で二〇分から三〇分の休憩を二回挟むのですが、この時間は劇場内にあるレストランやバーがシャンパンなどをオーダーする人たちでとてもにぎわいます。しかも、この間のレストランは予約制なのだそうです。単に舞台を鑑賞することだけが目的ではなく、パートナーと食事をしながら、舞台についての感想を互いに語り合うなど、会話を楽しむ大切なひとときなのです。私たちは、オーブンテラスでシャンパン



↑芸術鑑賞に訪れる人々

を嗜む人たちを横目に、ホールの裏手に回り、ガラス越しに衣装部屋を覗くことになりました。実際に舞台上で使われる衣装や小道具、そしてかつらなどはすべてこの劇場内にある作業場で製作されているそうです。舞台裏のほんの一面を見ただけですが、華々しい舞台を支える人たちの絶え間ない努力にあらためて心を打たれました。

バレエレッスンを体験して

舞台での感動の余韻に浸った私は、その後自分でもバレエを踊ってみたいくなり、言語面はもちろん、体力面の不安も抱きながらもロンドン市内にあるダンススタジオを訪れました。ロンドンには、成人を対象にしたダンス専用のスタジオがいくつもあります。また、クラシックバレエ、ジャズダンス、タンゴ、そしてアフリカダンスなど幅広いジャンルの踊りが用意されており、レベルもビギナーからプロフェッショナルまで豊富にそろっている上、いつでも始めることができます。

誰もがダンスに親しみやすい環境にあるのです。私を通してのクラスでも、若い女性だけではなく、美容と健康のために続けている中年の女性、ポロシャツに短パン姿で楽しんでいる年配の男性など、幅広い層の人たちが、それぞれ憧れのバレリーナを目指して(?)練習に取り組んでいます。私自身ももちろん初心者で、日本語でのレッスンでさえとても難しく、英語でとなる



↑バレエレッスンの様子

と二倍の集中力が必要となるため、一時間半の練習は決して楽ではありません。しかし、少しずつレッスンにも慣れてきたころ、自分の動きを褒められたときはもちろん、先生の説明の中に垣間見るジョークにみんなと一緒に笑えたときは、疲れを忘れるくらいうれしいひとときです。イギリスの伝統文化に直に触れているという実感がわいてきます。バレエを愛する仲間との今後のレッスンを楽しみます。

おわりに

イギリスでは、より多くの人に芸術に親しんでもらうための各種イベントが開催されます。夏になると、公園などで野外劇やコンサートが開催され、ピクニック気分で見賞する多くの人々にぎわいます。また劇場の舞台裏を見学し、その歴史などについて学習する「バックステージツアー」も大変な人気で、私も参加してみたところ、幅広い年齢層の参加者が熱心に学んでいました。人々の芸術への関心の高さを実感します。みなさんも、イギリスを訪れた際には、劇場で生の芸術に触れ、華麗な舞台に酔いしれてみてはいかがでしょうか？